

4. 平成 26 年度 生坂村教育委員会・松本大学 域学連携事業

生坂小学校「こたろう大学」での実践～人間関係を育む～

人間健康学部スポーツ健康学科 犬飼己紀子

I. 「こたろう大学」と「あそび隊」の連携

松本大学と生坂村教育委員会との「域学連携事業」の2年目にあたる2014年度、犬飼ゼミナールでは、運動遊びを通じて生徒の心身の育ちをねらうと同時にサポートをする学生の人間関係力を引き出す、双方向の活動効果をねらいとして「生坂小学校こたろう大学」と「あそび隊」事業を企画、実施した。

子どもたちにとって「遊び」は、体力・運動能力の向上など身体的発育発達に留まらず、知的・心的・社会的成長にも効果が期待できるなど、意味深く重要な要素であることは周知のとおりである。近年、特に子どもの体力低下が叫ばれる中、大学でスポーツや運動を専門に学ぶ学生等は「運動能力向上のための対策として児童期にスポーツや運動に取り組むことが重要」と、直接的な運動指導の提供で問題解決を捉えがちである。そのような学生には、まず子どもたちと直接対面してその実態を体験的に知ることには大きな意味がある。児童にとっての当事業の意味は、子どもたちが学生と体当たりして駆け回り、こたろう大学での体験を“遊び”として捉えることで、自己解放を促し活動の楽しさを体感してもらうこと、さらに、仲間は自分にとって必要で大切な存在であるという体験学習の効果を期待するものである。

1. 子どもの実態に即した事業推進目的の共有

本連携事業では、全校生徒73人という小規模小学校に見られる子どもの育ちに着眼して、「生徒間の固定されがちな人間関係」を課題としてス

タートした。

2. 事業計画

生坂小学校「こたろう大学『生坂あそび隊』」

(1) ねらい

現代に生きる子どもたちのコミュニケーション力をどう高めていくかについては、社会的課題である。生坂小学校においては、小規模校の特徴ともいえる固定化されがちな人間関係や、自分らしさを大切にしながら対人関係を調整していくコミュニケーション力が育ちづらい状況が指摘されている。そこで、グループワークトレーニング（以下GWTと記す）の手法や運動遊びを取り入れて、より良い人間関係づくりを築くための活動を推進し、子どもたちの「心の健康」と「体の健康」の両面を成長させていきたい。

(2) 実施期日及び日程

2か月に1回の頻度で計3回のあそび隊授業時間を設けること、さらに発達の年齢差を考慮して2学年ずつの区切りとし、1日に3コマの授業を組み、全学年に向け授業を実施する計画を立てた。

3. 準備と目標の共有

学校の授業内容に「あそび」というキーワードを充てることで、こころの解放をねらう。あそび隊が目指すところは、「生徒の夢中」を引き出し、対人関係に起こりがちな無用な不安や探り合いといった懸念を早期に払拭し、活動中に生徒個々の「自由な子どものこころ」を引き出すことである。

指導者と学生スタッフ（大学）、そして参加す

表1. 「こたろう大学～生坂あそび隊～」全3回の実施日程

生坂あそび隊 実施期日	1日の時間割	対象学年 他	人 数（基本）
第1回：4月25日（金）	9：00～10：00	1・2年生	1・2年生 24人
第2回：6月27日（金）	10：50～11：50	3・4年生	3・4年生 21人
第3回：10月24日（金）	14：00～15：00	5・6年生	5・6年生 28人
（第3回は9月18日の予定を延期し、行事の重なる時期を避けて実施した。）	16：00～17：00	教員研修	11名

る教師（小学校）の姿勢として次のことを確認し合った。

- (1) 一緒に参加して生徒と遊ぶ。
- (2) 不要な指示・命令・叱るといった子どもへの関わりをなくす。
- (3) スタート時の「早く並びましょう。」等についても言わない。
- (4) 活動中は楽しさや喜びのみでなく、発生する失敗や不安、葛藤や苦悶など一つひとつの場面に焦点を当て生徒の気持ちに触れていく。
- (5) 「〇〇さんの主体的な参加を引き出すためには、どのような声かけが必要だろう」という問いを持ちながら一人ひとりの様子を見る。
- (6) 感情を表現し合う生徒間の関係性や場面消化の在り様をおさえて、終了後の職員研修でのふりかえりテーマに活かしていく。

以上を事前に確認し合い、初回の活動をスタートした。

なお、低・中学年向け授業は、あそび隊の時間を学校生活における自己解放に向けた活動のきっかけづくりの時間とし、ここでは主に高学年（5・6年生）の授業に焦点を当て、学習のねらいを「自他肯定の関係構築」に定め実施した。

II. GWT の手法を取り入れた「生坂あそび隊」の実践

1. 第1回こたろう大学「生坂あそび隊」

(1) 活動のねらい

「あそび隊」活動の場に許容的雰囲気をつくり、参加児童の自己解放をはかる。

【プログラム】



※写真1. 活動後の「ふりかえり」場面



※写真2. 特徴ある児童の主体行動と仲間

【指導者の見とり】

生坂小学校の生徒は、聞く力・素直に行動に移す力・仲間を誘う力・教え合う力を持っている。

また、思春期に入る男女、又は学年をまたぐ上級生に対し、無用な抵抗がなく、わずかな恥じらいを見せるが一緒に活動に向かう姿勢をもっている。

教師が捉えている「特徴ある児童」について、今回は自己中心性や、強すぎる主張で他を威圧するなどの行動は見られなかった。むしろ集団がグループとして行動するときに必要な「課題遂行機能（performance 機能）の場面が観られた。

(2) 第一回 教員研修

初回「あそび隊」の終了後、教員向けに活動を振り返る時間を持った。

筆者からは、あそび隊での生徒との関わりに触れ、人間関係が固定化されがちという小規模校でも、「子どもが自分らしさを大切にしながら対人関係を調整して社会に通用する人間関係を築く下地をみがき、『心の健康』と『体の健康』の両面を成長させたい」という活動のねらいを可視化（図1）して、初回から3回目の活動までのあそび隊授業の活動の流れを説明した。

2. 第2回こたろう大学「あそび隊」

(1) 活動のねらい

2学年（5・6年生）の交流を通し、グループの関わりの中で相手の存在に気づく。

【プログラム】

5～6年生28名をゲームで4グループ（偶然性による）に分け、グループで移動しながら時間内に4種目の活動を全て体験するように設定した。

- 1) 傘袋風船投げ 作る、投げる、工夫
- 2) スラックライン 体幹バランス、協力

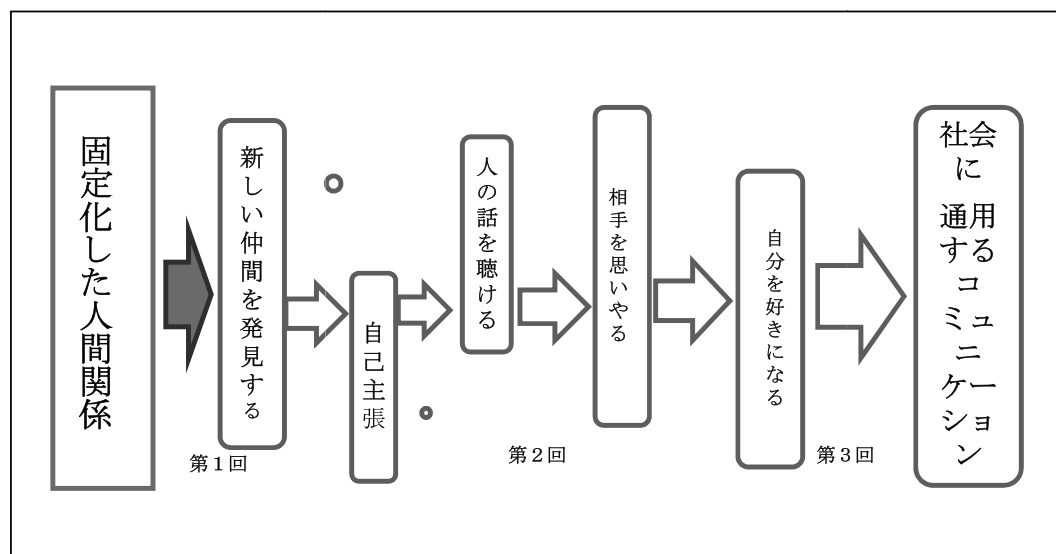


図1 目的に向けた活動目標の可視化

3) もじもじシート 工夫、知恵、創造、思いやり

4) ラートに挑戦 挑戦、自己決定

以上4つの活動をグループ全員が体験し互いの頑張りを間近に見ることで、グループに何が起っていたかを振り返る。活動終了後、グループごと「ふりかえりシート」(図2)に記入した。

(2) ふりかえりとグループシェア

5・6年生の活動においては、このプログラム(時間)が一番の目的、ねらいである。運動を伴う活動はややもすると、やりっぱなしになりがちだが、活動で体験したことの振り返り(フィードバック)、互いの感じたことを伝え合うこと(シェア)こそ、自他肯定の関係を生む学習場面には欠かせない。

この時間に、子どもたちは円陣を組んでシートに記述した内容を口頭で開示し合った。「ふりかえりシート」に書かれた仲間の言動を聞いているときの子ども達の表情(内面)に、教師は目を向けることが重要である。

「体験学習」は、「体験教育」ではなく『学習』をうたっている。生徒が感じていたことを気づきに変える時間がふりかえりとシェアである。活動後教師の視点での教育成果のみで終わることはGWTの学習プロセスから外れることとなり、折角の体験による学びを半減することになりかねない。教師の気づき以上に、子ども達は相互に影響しあい感じ取っていることがある。まずは生徒の言動に焦点を当て、彼らの体験を教材として取込むことで、自尊感情を培う自他肯定の教育環境を

生むことが可能となるのではないかと考える。

(3) GWTにおける「ふりかえり」の意味

「ふりかえりシート」は、「活動が楽しかった、頑張った上手にできた」だけで終わるのではなく、活動の中でグループの仲間が、どのような発言や行動をし、自分や仲間がそれによってどのような刺激(作用)を受けていたか、を知る相互作用への視点や気づきをもたらせることにある。

記入時、生徒らは真剣な様子で活動を思い起こし記録する様子が見て取れた。シートに記入し、自分が感じていたことに気づいておくこと、今ここの感じを気づきに変え、さらにそれを仲間シェアしていくことがGWTの重要な学習プロセスである。

仲間のコメントを聴きながら、自分の名前が呼ばれ仲間の感じていたことを聞かされた時に、どのような想いになっただろうか。生徒の書いた「ふりかえりシート」には、5・6年生の学年の枠を超えて様々なメッセージが記録されている。

(4) 第二回 教員研修

当年度、生坂小学校は「松塩筑教育課程研究協議会の研究発表校」として生徒の自尊感情を養うことをテーマに掲げ、その育ちを見とらうとしている。

今回対象としている生坂小学校の5・6年(11~12歳)生徒は少年期にあたる。彼らのこれからの人間関係はその成長過程で、仲間の存在は自分にとっての重要な他者として変わり、同世代との関係性の中で仲間からもらう承認・賞賛のストローク(投げかけ)は、大人からもらうそれより

生坂村小学校 2回目

平成26年6月27日



【ふりかえりシート】

1. 今日、グループで行った活動を思い出して書いてください。(番号に○をしてください)

① グループは、どのくらいの力を出して活動に取り組んだと思いますか。

5. (100%の力) 4. (75%) 3. (50%) 2. (25%) 1. (10%)

② あなたは、どのくらいの力を出して活動に取り組みましたか。

5. (100%の力) 4. (75%) 3. (50%) 2. (25%) 1. (10%)

2. グループ活動では、仲間どうし皆でどのような行動や会話をしていましたか。

あなたが気付いたことを書いてください。(自分以外の人の行動を思い出してください。)

	果たしていた役割	名 前	行 動
1	一番たくさん話していた人は誰ですか。		
2	あなた(皆)の話を一番聞いていたのは誰ですか。		
3	良い考えを出したのは誰だと思いますか。		
4	一番たくさん行動した人は誰ですか。		
5	一番笑った(笑顔だった)人は誰ですか。		
6	たくさん質問をした人は誰ですか。		
7	みんなと違う意見を出したのは誰ですか。		

<今日の発見> こんなこと見つけたよ。

図2. 4種目の活動後のグループによる「ふりかえりシート」

も重い意味を持つと推測する。自尊感情は一人で育まれるものではなく、相手との関係性の中で育まれることが理解できる。GWTの手法を活用した生坂小学校あそび隊事業では、自尊感情を育む教育的交わりとして、生徒の目で観て、耳で聞いて感じたことを言語化していく。さらにこれをシェアすることでプラスの相互作用を引き出すことをねらっている。

3. 第3回 こたろう大学「あそび隊」

(1) 活動記録

ねらい：グループ活動を進める中で、自分の行動がグループに与えている影響を知る。
最終回となる3回目は、前半に学生の力を活用

し、持ち味を生かした運動指導の展開を計画した。

【学生の指導による活動展開】

- 1) ゲームによるグルーピング 担当：レクリエーションコーディネーター資格取得学生
- 2) マットおもしろ運動で体幹トレーニング 担当：ラート部学生
- 3) キャッチボール 担当：ソフトボール部学生

過去2回の活動実践は、生徒の側に「あそび隊」として訪問する学生と交流することへの期待感を高めてきた。通常、指導の場では、指導する者とそれを受ける者との相互間に相手に対する良好な関心が存在することが、学習効果を上げるうえで重要な要素と考える。これまで学生達は、あ

そび隊でのリーダー役として、生徒の中に入り、指導者としてまた時には活動仲間として生徒に関わる中で、生徒等に“失敗や上手くいかないことも許容し受け止められる場である”という感覚を引き出す役割を担ってきた。そのような関係ができていた学生から受ける指導を、生徒等は憧れにも通じる姿勢で真剣に取り組んでいた。

(2) GWT 授業展開の最終プログラム

学生による生徒への活動展開を終え、最終回となるあそび隊事業は、「生徒の関係力構築に向けたGWTの最終講義」として実施した。学生の指導により活動そのものへのモチベーションが高まっている生徒たちに対し、あえて遠慮・不安・ためらいなど葛藤が生じる活動を実施した。本プログラムのねらいは、活動中に仲間から得るプラスのストロークが相互作用となって一人ひとりの感情に働きかけて、自分やグループの次の行動に影響していることを知ることにある。

【目標】

生徒一人ひとりが、「自分にとって仲間は大切な存在である」ことに気づく体験につなげる。

【活動】

「人間コピー」 引用：(学校グループワーク・トレーニング) 坂野公信 遊戯社

(3) 振り返りとグループシェア

「ふりかえりシート」に書かれたグループの仲間に対する気づきには、互いの行動、言葉のやりとりが多く記入されていた。グループメンバー個々の行動や言葉を捉えて気づきに変えられるようになったことは、自己変容に向けてのステップとなったことと考える。

グループで起こっていたことに気づき、自分の行動をメンバーの言葉で知らされることは、自分の言動がグループにどのような影響を与えていたかに気づくための一歩である。

思春期に向かう子どもたちにとって、相互に影響を及ぼす重要な他者となる同年代の仲間から、自分の言動を知らされること、それによって発生するグループへの影響に気づくことで、次を取る行動をどのようにしていこうか、という内面から起こる自己変容を期待したい。

まとめ

11歳12歳(小学5～6年)は、友人関係の固定化が始まり、他の世代を寄せ付けず距離を置く

ような行動を見せる年代と言われる。自己犠牲的な友人との関係も見られるなど、教師や親の言葉より仲間関係における相互作用に強く影響される時期である。このような特徴を捉え、体験学習で重要視する「ふりかえりと気づき」の意味を捉えてみた。

同じ活動を体験した仲間から「ふりかえりシート」に記録された自分の言動を知らされた時、生徒の感情に何が起きているのだろうか。

例えば「自分が間違っていたために、みんなに迷惑をかけた」と考えていた生徒に対し、仲間から『だいじょうぶ』の一言をもらえたことで、迷わず行動を続けることができた。等、間違いや失敗体験時に起こりがちな緊張や動揺への対応を学んだ児童は、他者に対する勇気づけの態度を学ぶ機会を得て、次に同じような場面に出くわした時の行動に生かしていくことが期待される。

教育現場における体験学習でねらうことは、活動をふりかえることで「自分の言動に気づき、相手の感情に気づき、グループの間に何が起きているかに気づく。」この気づき学習が重要なポイントであり、欠かしてはならないものとする。